

論文

台湾鄭氏とジャワ

久礼克季

キーワード

台湾鄭氏 ジャワ島 バンテン王国 ジャワ北岸地域  
オランダ東インド会社

はじめに

鄭氏は、一六世紀後半以降シナ海域における有力な海洋商人であった李旦の集団を、一七世紀前半に鄭芝龍が引き継いだことで台頭した海上勢力である。彼の息子である鄭成功は、台湾におけるオランダ東インド会社〔正式名称は連合東インド会社「Vereenigde Oost Indische Compagnie」(VOCと略す)の拠点であったゼーランディア城を一六六二年に占領して以降、鄭経、鄭克塽と続く政権を形成した。台湾鄭氏は、大陸を支配下においた清朝や台湾を追われたオランダ東インド会社と対抗しながら、清

朝に征服される一六八三年まで台湾や廈門などを拠点に日本や中国、東南アジア各地と貿易を展開する。このうち本稿が取りあげるジャワについては、特に一六六〇年代後半以降、胡椒や船舶の取引を通じて、バンテンやジャワ北岸地域<sup>〔1〕</sup>において鄭氏の勢力が活発に活動していた。本稿では、主に台湾を拠点に置いた時期について取り上げることから、当該の勢力を台湾鄭氏として、彼らの海上貿易やそれと密接に結びついたジャワ島における活動にかんする議論を行う。

台湾鄭氏を扱った研究は数多く存在するが、本稿が扱う海上貿易と関連するものは、主に文献史学からアプローチ

したものと考古学からアプローチしたものが存在する。

前者に関しては、近年では鄭維中〈Cheng Wei-chung〉や上田信による研究が顕著なものである。鄭維中は、一六世紀後半以降中国沿岸で活発に展開する中国海洋商人の活動を論じるなかで、鄭芝龍から鄭克塽の時代に鄭氏が台湾を拠点として日本の「鎖国」や清朝の海禁令を利用して中国―日本―東南アジア大陸部と島嶼部の一部で活発に海上貿易を展開していたことを指摘する。上田は、海禁政策下で絶えず陸上貿易と海上貿易とが一方で連携しながら他方では対立した明清時代における社会経済を論じるなかで、特にシナ海世界の各地で展開した海上勢力の活動において台湾鄭氏について言及し、特に鄭成功が作った貿易組織や諜報活動と結びついた鄭成功の貿易やオランダ人との抗争、その延長線上でおこった台湾占領について論じる。<sup>③</sup> これら両者の研究から、台湾鄭氏の活動にかんして、文献史学からは台湾占領ならびに清朝やVOCとの外交、日本や中国、東南アジア大陸部との貿易の実態が明らかとなっている。

一方、後者については、坂井隆の研究が挙げられる。坂井は西ジャワのバンテンにある遺跡から大量に出土する肥前陶磁の発掘や出土物の分析を通じ、その多くが一七世紀中葉以降に発見されていたことや、当該の時期が清朝海禁

令の時期にあたり中国からの陶磁器輸出が非常に困難であったことなどから、当時バンテンに肥前陶磁を運んでいたのは台湾鄭氏だったと指摘する。<sup>④</sup> この指摘から、当該時期における台湾鄭氏とジャワ島（バンテン）との貿易をはじめとする関係が提示される。

しかしながら、これら先行研究においては、文献史学からの研究成果と考古学からの研究成果が符合していないとの問題が存在する。台湾鄭氏の海上活動についてその全体像を明らかにするには、これまでの東アジア―東南アジア大陸部・島嶼部の一部での活動に加え、坂井の指摘するジャワ島における活動をも含めて検討する必要がある。この考察を行うことによつて、台湾鄭氏の活動がこれまでよりも詳細にまで明らかにすることができる。それだけでなく、バンテン王国をはじめとする当時におけるジャワ島の主要勢力と台湾鄭氏との関係、また台湾では鄭氏と決定的に敵対をしたVOCのジャワ島における台湾鄭氏の活動への対応をも明らかにでき、一七世紀のジャワ島やオランダ東インド会社の活動を検討する上でも大きな意味があると著者は考える。

以上の点を踏まえ、本稿では特に一七世紀後半のジャワ島における台湾鄭氏の活動について、当時バタヴィアをはじめジャワ島各地に拠点を持った主にVOCの史料を中心

に使い、一部イギリス東インド会社の文書も用いながら考察する。これを通じて、一七世紀後半、特に一六六〇年代後半から一六七〇年代前半にかけて、台湾鄭氏がバンテン王国の有力者層やその配下の華人と連携しながら同地と台湾や中国沿岸との貿易を展開し、ジャワ北岸地域でも活動を行ったことや、その背景を明らかにしていく。

## 一 台湾鄭氏とその貿易・対外関係

台湾鄭氏の貿易やジャワ島での活動について論じる前に、まずは背景となる彼らの歴史についてその前史も含めて概観し、続いて台湾鄭氏が行った貿易政策と、貿易の概要について、この節で述べていきたい。

一五六七年、後期倭寇の終息とともにそれまで明朝によって行われてきた海禁政策が解除されたことよって、それまで「密貿易」の形で活動を行ってきた中国の海洋商人達は活動を活発化させ、それに伴い組織化して活動を行う動きが始まった。こうしたなかで台頭したのが李旦である。海洋商人の主要人物であった彼は、まずマニラ、その後平戸に拠点を置き、中国やトンキンなど貿易を行い、台湾へも朱印船を派遣した。加えて李旦は、中国本土と台湾とを航行する船舶を攻撃して、台湾を経由する貿易ルー

トの独占を図った。

その李旦の後を継いだのが、鄭芝龍である。李旦の下で海上貿易を始めとする活動を行っていた彼は、その功績が認められ、李旦に信任されて義理の親子関係を結び、一六二五年に李旦が死去すると、その資産のほとんどを入手して後継者となった。その後鄭芝龍は、福建沿岸地域で武装して活動を展開して競争相手を吸収することにより更に勢力を拡大し、一六二八年には厦門を占領した。海上での武力活動を通じて自らの下で洋上における治安を安定させた彼は、明朝からその功績を認められ、「海防遊撃」という沿岸警備の役職に任ぜられた。

この鄭芝龍の息子で、後に台湾占領を行ったのが、鄭成功である。一六二三年鄭森という名で平戸に生まれた彼は、一六三〇年に科擧の準備のため福建に戻ったことで中国沿岸と関係を構築し、父と並んでシナ海域の海洋商人および海上勢力の指導者として台頭した。自らの勢力を明朝やその亡命政権に認められた彼は、一六四五年に同王朝の隆武帝から明朝の皇室と同じ「朱」姓を与えられ、名を「成功」とする。中国本土において明清交代が展開するなか、父鄭芝龍と息子鄭成功は、それぞれ異なる対応を取った。鄭芝龍は、南京にあった明の亡命政権が壊滅した際に擁立した隆武帝が一六四六年に捕らえられて死去する

と、清朝に投降する。一方、鄭成功は父には従わず、皇帝に擁立された永曆帝を支持する。鄭芝龍は、鄭成功に対して投降を持ちかけるが、彼がこれに応じなかったことで、鄭芝龍は清朝によって成功と連絡を取っていたとの嫌疑をかけられ一六六一年に処刑された。こうして、鄭成功は、鄭芝龍が持っていた制海権を引き継いだ。その後明朝の復興を目指す鄭成功は、一六五五年以降南京の奪回を目指し、さらに一六五八年には北伐に出るがいずれも失敗する。逆に一六六〇年に清が攻勢をかけると、彼は陸地の支配地域の大半を失い、廈門と金門島を中心とする島々を保つのみとなった。失地回復を図る鄭成功は、一六六一年にオランダ東インド会社の台湾・ゼーランディア城を攻撃し、一六六二年これを陥落させ台湾を占領、同じ年には当時スペイン領だったマニラ遠征を計画し、この情報が洩れ当地で華人虐殺が発生する。こうして清朝と対抗しながらシナ海域で強大な勢力を誇った鄭成功だったが、台湾占領の直後に急死した。

鄭成功の後を継いだのが、鄭経である。一六四二年に鄭成功の長男として生まれた彼は、廈門を拠点に育った。一六六二年の鄭成功の死去に際して、廈門で後継を宣言したが、翌一六六三年にオランダ東インド会社艦隊が廈門・金門島へ攻撃を行ったことにより彼は前者を追わ

れ、一六六四年に拠点を台湾へ移して活動を行う。その後一六七三年から一六八一年まで中国本土で展開した三藩の乱が起こると、鄭経は廈門の奪還を意図して三藩側に参加し、一時的に廈門中心とする福建・広東の勢力圏を獲得した。しかしその後清朝が反撃したことで、彼は一六八〇年台湾への撤退を余儀なくされ、翌一六八一年に死去した。

鄭経が死去して以降、台湾鄭氏では鄭克塽が後継者となるが、後継者争いをめぐる内紛から王国は弱体化したことでや更に清朝から攻撃を受けたことで、一六八三年鄭克塽は同王朝に降伏し、台湾鄭氏政権の幕が閉じた。

こうした台湾鄭氏は、どのような貿易を行ったのか。その政策について、上田は以下のように述べる。鄭氏は、自らは直接貿易に関与せず、自政権が持つ「五大商」と呼ばれる商人組織の商人に資金を貸し付けて商売を行わせ、その利息を得ることで財政を賄っていた。また五大商は、貿易だけでなく諜報・工作活動も行っており、鄭氏政権において極めて重要な役割を担っていたといえる。加えて台湾鄭氏は、特にシナ海を航行する貿易船に航行許可証である「牌」を持たせ、それを持たない船舶もしくは所有する牌の期限が切れている船舶については拿捕し、その貨物を押収していた<sup>6)</sup>。こうした政策から鄭氏は、シナ海域では、同海域において自由な航行や貿易を求めめるVOCと激しく対

立した。<sup>⑦</sup>

一方、鄭氏の勢力が行った貿易の概要については、鄭維中が次のように説明する。鄭芝龍時代の鄭氏は、中国の生糸と日本の銀を扱った貿易を主として展開し、加えてマニラから中国へ向けた銀の輸入も行っていた。これは、当時中国における銀の需要と日本における絹〔生糸〕の需要がともに非常に高かったことに由来する。一六四〇年代以降、鄭氏は鹿皮の取引を通じて、ベトナム南部の広南阮氏やカンボジアを経由した形でシヤムとも貿易を行う。同年代後半以降になると、シヤムとの直接貿易を大規模に行い、さらに北部ベトナムの鄭ヘチン<sup>⑧</sup>氏政権とも貿易を展開する。その後一六五〇年代に入ると、中国では胡椒、日本では鹿皮の需要がそれぞれ高まったことにもない、鄭氏は、ベトナム・シヤム・カンボジア―中国―日本間の貿易を強化する一方で、同年代前半以降には東南アジアにおける胡椒生産地の一つであるスマトラのパレンバンと貿易を行う。また、一六六〇年代後半には、マレー半島の東岸にあるリゴール<sup>⑨</sup>とも活発に貿易を行った。また台湾鄭氏は、一六六五年以降、特にカンボジアなどで活発に貿易を展開した。カンボジアでは、プノンペンにあったオランダ東インド会社の商館が一六六七年台湾鄭氏によって商館長が殺害されて商館も放火されるといふ事件があり、以後この地

史苑(第七九卷第一号)

でVOCの商館が再開されることはなかった。<sup>⑩</sup>カンボジアとリゴールで鄭氏の活動が活発となった背景には、以下のような背景がある。カンボジアについては、台湾鄭氏とオランダ東インド会社が敵対していく状況で、後期アユタヤ朝治世のシヤムは後者を支持し、一六六五年にはVOCと友好条約を締結したことで、それまでシヤムに來航していた鄭氏配下の商人が広南やカンボジアへ逃れたという事情がある。他方リゴールに関しては、オランダ東インド会社がシヤム湾を封鎖した際に、その迂回ルートの中継地として当地が注目され、貿易が展開するようになった。こうした状況のなかで、台湾占領以前には、鄭氏龍がVOCのジャワ島における本拠地バタヴィアとも、配下の華人を使って大規模に貿易を行っていたことを、ブリュッセイや鄭維中は述べている。<sup>⑪</sup>だがその一方で、台湾占領以前からオランダ東インド会社と緊張関係があり、特に一六五〇年代以降会社と激しく対立した鄭成功がバタヴィアへ船を派遣したのは、一六五五年、一六五四年、一六五八年と極めて少なかった。加えて一六五八年については、金・磁器・銅と胡椒の取引こそ付随して行われたものの、その主たる目的はオランダ東インド会社との交渉であった。こうした鄭成功のバタヴィア訪問について、VOCは、当惑しながら拒否せずに渋々受け入れたことも、両氏は指摘している。<sup>⑫</sup>

さらに、著者は、台湾鄭氏がマルク諸島においても活動していたことを指摘しておきたい。『バタヴィア城日誌』には、一六六三年六月一日の記事に、前年にマルク諸島でオランダ東インド会社によって拿捕された台湾鄭氏の船舶について記録されている<sup>16)</sup>。鄭氏が同諸島に來航した目的は、間違いなく同地域で生産される丁子、肉豆蔻といった香辛料の入手だろう。この年におけるマルク諸島へ航海は、フリピンを経由して行われた可能性が高い。その理由には、拿捕された年がまさに鄭氏による台湾占領の年で、台湾鄭氏と会社との関係が極めて険悪であったこと。そのため、オランダ東インド会社が拠点を置き活発に活動を行っていたジャワ島を経由するルートで航海することが、鄭氏にとって非常に危険であったこと。また実際に当該時期のVOC文書には、バタヴィアを除いたジャワ島周辺で鄭氏の船舶の航行を記録する記事が見られないこと。他方で彼らは、この時期には既にマニラをはじめフリピンへとしばしば航海し貿易を行っていたことが挙げられる。

以上の事実をまとめると、一六六〇年代まで台湾鄭氏およびその配下にいた華人は、中国沿岸、日本、東南アジア大陸部および島嶼部の一部で活動していたことがわかる。しかし他方で鄭成功は、三度バタヴィアへの航海を行ったものの、オランダ東インド会社との強い緊張・敵対関係が

あったことから、ジャワ島での活動は一六六〇年代初頭まで他の地域と比べると非常に限られていた。だが、こうした状況は、同年代後半以降に大きく変化することとなる。

## 二 台湾鄭氏とジャワ島

台湾占領以降、台湾鄭氏ならびにその配下の華人、彼らと関係を構築した勢力がジャワ島においてバタヴィア以外で活動が顕著になるのは、一六六〇年後半から一六七〇年代初頭の時期である。当該時期において台湾鄭氏は、まずバンテンと関係を構築したことを契機に活動を開始し、遅くとも一六六九年以降当地においてその活動が顕著となった。坂井は、バンテンにおいて肥前陶磁が多く出土する遺跡について、王国の首都があったバンテン川河口のラーマとその東方にあり同王国の離宮であったティルタヤサの二つを挙げ、特に後者が最も肥前陶磁の出土する遺跡であることを指摘する<sup>17)</sup>。加えて坂井やギオーは、後者が使われた時期が一六六三〜一六八二年であったとする。このことから、バンテンで台湾鄭氏が活躍した時期と当地において最も多く肥前陶磁が出土する時期は、完全に一致することがわかる。

バンテンにおける台湾鄭氏を記録するVOCの各文書で

は、その多くにおいて当地の有力者と台湾鄭氏との密接な関係が現れる。その契機の一つとなったと考えられる出来事が一六六六年から一六六七年にかけて生じたことが、VOCバンテン商館の報告に記録されている。

こちらの停泊地に、広南から一隻、バラストの：「判読不能」：、金糸数箱、鉄製の調理用具、陶器および他の小物類を携えたジャンク船が到着する。「当船は」税関長テンツェコ、別名キアイ・ンガベイ・チャクラダナのもので、八ヶ月前にここから航海した。そこに国姓爺「Ⅱ鄭経」の三隻が突然現れた。ジャンク船は日本から来航し、嵐のため台湾を越えて行きついたものだった。広南では胡椒は一ピクルあたり四両で販売され、他の品物と一致する。そういうわけで、取引について利益は全くなく、この航海について彼らは広南にうんざりしていると話している。

この記事は、管見の限り、鄭氏の台湾占領後オランダ東インド会社バンテン商館の報告において初めて見られる台湾鄭氏関連の記述である。当該の文書で重要な点は、バンテン王国の船舶が広南を訪れた際、日本からの帰路で台風に遭い当地に来航した台湾鄭氏の船と接触したこと、また

バンテン側が広南での胡椒取引は利益が上がりず不満を感じたことにある。先述の通り、当時において台湾鄭氏は胡椒の中国への販売を貿易の柱の一つとしていた。他方、この時期のバンテン王国は、アブドウル・カディル「位：一六二五―一六五一」とアブドウルファタ・アグン（ティルタヤサ）「位：一六五一―一六八二」両王の下で全盛期にあり、特に後者の時代には南スマトラや西ジャワ内陸での胡椒栽培を掌握することで、胡椒を中心とする貿易活動を大きく展開させていた。胡椒を求める鄭氏とその販売先を求めるバンテン、互いの利害が一致する両者の広南における邂逅は、台湾鄭氏とバンテンとの関係構築において、非常に重要な出来事だったといえよう。

その三年後の一六七〇年にバンテン王国の船舶が台湾を訪れた記事では、この時期台湾鄭氏がバンテンを既に歓迎する態度をとっていたことが窺取できる。

バンテンの税関長キアイ・ンガベイ・チャクラダナによって台湾へ送られた数隻のジャンク船が、海賊によってほぼ全て略奪された。しかし、国姓爺「Ⅱ鄭経」の華人によって助けられ、タイオワンへと連れて行かれ、そこで非常に歓待され商売も認められた。

上述した記事とこの記事との間約三年、VOCの各文書では両者が接触した記事は見られない。しかし、この記事で示されるように一六七〇年段階でバンテンのジャンク船が台湾鄭氏によって助けられ台湾で歓待されていること、またこの記事以降バンテン王国と台湾鄭氏の両者が関係を構築・強化する旨の記事が急増する点を考慮すれば、VOC史料では空白となっている一六六八、一六六九の兩年において、オランダ東インド会社が把握していないところで何らかの形でバンテン王国と台湾鄭氏との接触が行われ、一六七〇年には両者の良好な関係が確立していた可能性が非常に高い。

翌一六七一年には、バンテン王国と台湾鄭氏との間で頻繁に、非常に多くの人やものが往来するようになる。以下の二つの記録では、そのことが示されている。

〔二月〕二十六日、我々のバンテン商館長から昨日付の書簡を受け取る。「それは」今月二日に彼へ送り然るべく受け取られた書簡に対する返答である。即ち、数日来バンテンにいる国姓爺（「鄭経」）のジャンク船についての我々の主張は「バンテン側には」知られていないが、彼には何らの問いかけもなく、話もされない。彼は、キアイ・アリアがバルスへの許可証を要求した

ことに対して、閣下の命に従って丁重に断った。

引き続き、商館長カーフは記す。今月二二日日曜日、バンテンには、当地の税関長キアイ・ンガベイ・チャクラダナのジャンク船が、一〇〇名を超える国姓爺の華人と共に来航し、彼らの商品や手荷物も上陸した。さらにもう一隻、敵である国姓爺に属する約五〇ラスト級のジャンク船が、上述の税関長とともに台湾を出航してグレンクまたはレンバンに向かい、そこでより大型のジャンク船を建造するらしい入札する（と言われている）。

バンテンから今日我々の元にジャワ人の船舶がやってきて、商館長ウイレム・カーフによる昨日の日付で次のような内容の書簡が届いた。

〔中略〕

国姓爺（「鄭経」）の華人ジャンク船がタイオワンからバンテンへやってきて、これ以前、今月六日の条で述べたように、次のことを話す。

〔中略〕

同じく現在、それ「鄭氏のジャンク」は今現在バンテンに来ており、二五〇人の乗組員と、華人により一〇トンの金（「に相当する」と見積もられている資金



を持っており、その資金は金の小判、スホイト銀、金糸、絹織物、種々の中国製の紙、その他小物類から成っている。同じ船で、若き国姓爺からバンテンのスルタンへ宛てた書簡も到着し、大きな場所を以て迎え入れられた。その書簡の内容は、華人やジャワ人の大官によって秘密にされ、商館長は何も聞くことはできなかった。やがて来た華人のうち三人が、やがてレンバンで数隻の船を造らせるために十分な資金を持って出発した。その他に、日々、多くの国姓爺の華人もバタヴィアや上述したジャワ東岸へと出航する。シャーバンドルであるカイツーは、一隻のジャンク船を台湾へ送る意図がある。というのも、前もってバタヴィアからの許可証を求めているからである。<sup>24</sup>

このうち特に後者には、鄭經からアブドウルファタ・アグンへ宛てられた書簡が大きな敬意をもって迎えられたことが記されている。上述の鄭氏側だけでなくバンテン側も彼らを歓迎しており、当時のバンテン王国と台湾鄭氏が極めて良好な関係を構築し展開していたことがわかる。またこの記録からは、金、銀、絹織物、紙などといった品物が台湾鄭氏側の貿易品だったこともうかがえる。他方、ここでは坂井が鄭氏の貿易品とする肥前陶磁は見られない。V

OC文書では、鄭氏が肥前陶磁を直接台湾からバンテンに運ぶ記録は少ない。<sup>25</sup>しかしその一方で、マカオを経由した取引が現れる。また坂井は、厦門を通じた取引記録の存在やベトナムとカンボジアでの肥前陶磁出土を指摘する。これらから肥前陶磁は、台湾―バンテンの直接取引と別地域を経由した貿易が並行して行われたといえる。その対価となるバンテン王国の主要貿易品は、上述した胡椒だった。例えば、イギリス東インド会社の一六七一年の記事には会社バンテン王や同地の華人ジャンク船の内通により胡椒を高く販売できなかったことが記され、一六七五年の記事ではバンテンからの華人船が大量に胡椒を持ち込んだことで会社は全く胡椒を販売できなかったと記録されている。<sup>26</sup>またVOC文書には、一六七七年に厦門へ向かうジャンク船が胡椒を運んだとの記録が存在する。<sup>27</sup>

ところで、これまで挙げてきたバンテン王国―台湾鄭氏関係の記事のほとんどには、カイツーやキアイ・ンガベイ・チャクラダナの名が見られることがわかる。また後述するジャワ北岸地域に関する記事にも、カイツーの名が現れている。オランダの各史料で一六五六年から亡くなる一六七四年までシャーバンドル<sup>28</sup>として名前が現れるカイツーは、当時のスルタンであるアブドウルファタ・アグンから高い信頼を得ていた人物であった。その大きな理由は

二つあり、一つには彼がスペイン領マニラとの貿易を通じてスペインレアルを入手して、バンテン王国の財政を安定させたことがある。また二つ目として、彼は、いわゆる東インド会社といったヨーロッパの貿易会社のような形でヨーロッパ式の貿易艦隊の編成を行おうとし、レンバンで何隻かの船をイギリス式の外見となるように造り替えていたことがあげられる。実際一六六九年には、イギリス人が当地で造り替えた記録も存在する。これらから彼はヨーロッパ式の貿易会社や艦隊を作ること強く意識したのではないかと考えられる。

一方、元々はテンツエコ（もしくはタンツエコ）という名の鍛冶であつたキアイ・ンガベイ・チャクラダナは、その能力をカイツーやバンテン王国に認められ、イスラームへ改宗したうえでジャワ名を与えられて税関長となり、カイツーの下で彼とともに王国の貿易において非常に重要な役割を果たし、カイツーの死後にはシャーバンダルとなつた人物であつた。彼が行つたことで最も注目すべきは、本稿が扱う台湾鄭氏との関係である。先に述べた通り、バンテン王国と台湾鄭氏との邂逅は、彼の船が広南に到着した時に起こつた。またギオーによれば、チャクラダナが主導して行つた貿易は、台湾鄭氏が活動したマカオやトンキンなどの地域や鄭氏と友好関係を結んだイギリスやデンマー

クの東インド会社との貿易であつたという。さらに、チャクラダナは明朝を支持する華人をバンテンに集めるため、一六七一年当地のパチナンに華人居住区を建設した。こゝで言及される華人の明朝支持者は、当然のことながら台湾鄭氏を指す。現在も一部が残る華人居住区は、一二〇軒の煉瓦造りの家屋に商店などから構成される大規模なもので、その建設は資金調達を含めチャクラダナが行つたという。スルタンのアブドゥルファタ・アグンやシャーバンダルのカイツーの完全な後援の下で、彼は台湾鄭氏とバンテン王国を結びつける役割を果たしたと言つて良いだろう。

台湾鄭氏がジャワ島で活動を行つたのは、バンテンだけではなかつた。上記の両文書では、共にバンテンに加えてレンバンやグレシクといったジャワ北岸地域への航海も企図していたことが記録されている。実際に鄭氏は、バンテンと連携する形で北岸地域にて活発に活動を行つていた。中部ジャワ北岸のジュバラにあるVOC商館からの諸報告には、特に一六七一年以降、ジャワ北岸各地において鄭氏自身や彼らと関係を持つ勢力や華人の活動にかんする記録が多く見られる。

レンバン湾のパジャンクンガンでは、バンテンのシャーバンダルであるカイツーが持つ大きさ約七〇コ

ヤンのジャンクが建造され、それを彼は国姓爺〔鄭經〕<sup>(34)</sup>の華人に売る。今月〔三月〕一日からパジャンクンガンにある上述の人物が所有するジャンクは、カイツーがより確実に航行することができるよう貴殿の許可証を得る意向を持って所有している。<sup>(35)</sup>

一六七一年のこの記事では、上述したバンテン王国との関係を使って、鄭氏が船を入手しようとするものであるが、翌一六七二年には実際に彼らが船舶を入手している記録もみられる。

レンバン湾には七隻のワンカン船がある。

〔中略〕

カリガナンには二隻の同型船があり、長さは一七尋で日本人が所有する。さらに「長さ」一一尋と一四尋の同型船があつて、国姓爺〔鄭經〕の華人が所有すると言われている。<sup>(36)</sup>

グレンクのアイシャが所有するジャンクが、ジュワナの川にある。彼は、それから様々な華人に販売する。しかし買手は、それが国姓爺〔鄭經〕によつて建造され、我々がそのことを知っているのので、あえて購

入することはしない。<sup>(37)</sup>

これらジャワ北岸地域における台湾鄭氏にかんする活動の記録を見ると、その多くが北岸地域における船舶の建造もしくは購入に係つたものであることがわかる。これには次の理由があると考えられる。鄭成功は、当時のシナ海域において最も有力な海上勢力であつた一方、彼が生涯明朝への忠誠を捨てずその復興を目指して清朝と敵対し続けた。このため、その存在を大いに警戒した清朝は、鄭氏や彼らと結びついた海上の諸勢力の活動を制限するために一六五六年に海禁令、その五年後の一六六一年には遷界令をそれぞれ発令した。このことは、その時点で鄭氏が中国沿岸において船舶の建造やその入手が不可能となつたことを意味する。鄭成功の後を継いだ鄭経も、父と同じ立場をとつていたことから、清朝との敵対関係は改善されず、同王朝による台湾鄭氏に対する政策が緩和されることはなかった。こうしたなかで前者からおよそ一五年、また後者から約一〇年が経過した一六七〇年代前半の時期には、台湾鄭氏やその配下が所有する船舶の多くは、耐用年数を迎えるかそれを超えていたものと考えられる。だが上記の事情から、鄭氏の中国沿岸での船舶建造は不可能であつた。また、鄭氏の本拠地台湾に比較的近く当時木材や造船で良

く知られていたシャムも、オランダ東インド会社と友好条約を締結したために、彼らはここでも船を建造することができなくなっていた。一方、レンバンをはじめ中部ジャワを中心にジャワ北岸地域は、良質なチーク材を産出することから、木材や造船で古くから知られていた。加えてこの時期の北岸地域は、この地域を支配したマタラム王国がアマンクラット一世「位…一六四六―一六七七」の下でオランダ東インド会社に対する貿易を活発にさせたことで船舶・木材、米、砂糖の輸出が活発に行われていた。またこれらの貿易では、当時この地域に多数流入・定着し、バンテンやバタヴィアに血縁者を持つ者や、その商業ネットワークにおいて両地との関係を持つ者が存在した華人が、非常に重要な役割を果たしていた。当時のジャワ島では、鄭氏やその配下の華人が活発に商業活動を行える基盤が形成されていたのである。こうした事情を背景に、一六六〇年代後半にバンテン王国と関係構築した台湾鄭氏は、同王国の華人有力者やその配下の華人ネットワークからジャワ北岸地域における造船の情報を入手したことで、同地域での船舶入手や建造を行ったのではないだろうか。

上記から、ジャワ島における台湾鄭氏の活動は、まず一六六〇年代後半に胡椒の取引を通じてバンテン王国と関係を構築することで始まり、その後一六七〇年代前半には

船舶の建造や取引を通して彼らの活動はマタラム王国の支配下にあったジャワ北岸地域まで拡大したことがわかる。こうした台湾鄭氏がジャワ島で活動するようになる背景には何があったのか。また、バタヴィアに拠点を置くオランダ東インド会社は、いわば自らの足下で活動を行う台湾鄭氏についてどのような対応を取ったのか。次節ではこれらについて論じていく。

### 三 ジャワ島における台湾鄭氏の活動の背景と

#### オランダ東インド会社

前節で述べてきたバンテンや北岸地域を中心としたジャワ島における台湾鄭氏の活動について、上述したジャワの事情に加えて、鄭氏が主に活動を行ったシナ海域における状況もこれを後押ししていたと考えられる。このシナ海の状況は、一方では台湾鄭氏の海上活動を後押しするものがあり、他方ではそれを制限するものもあった。

前者については、以下の通りである。先に触れたように、台湾鄭氏の活動に対して彼らと敵対する清朝は海禁令と遷界令を発令していたが、この両者はともに、当時ポルトガル領となっていたマカオについてはその対象としていなかった。このため、台湾鄭氏をはじめとする海上勢力は、清朝が禁令を敷く状況下でも、当地を拠点ないし中継地と

すること、シナ海域での商業活動を行うことが可能であった。事実、当該時期におけるバタヴィアには、ポルトガル領マカオから多くの華人が来航している。これらの華人のなかに鄭氏の配下となっていた者が多数存在していた可能性は、非常に高かったのではないか。また、当該時期の東南アジア大陸部においては、台湾鄭氏の活動が非常に活発であった。加えて、一六七〇年頃以降の中国沿岸では、地元を中心に当局が黙認することによって遷海令が実質的に解除され、マカオを中心とした海上での「密貿易」が常態化していたと鄭維中が指摘している。<sup>39)</sup>

だがその一方で、後者の状況も同時に展開する。その最も顕著なものは、オランダ東インド会社と良好な関係にあり会社と友好条約をも締結したシャムが、一時中断していた日本との貿易を一六六五年以降再開したこと。また当時薩摩藩の属国となっていた琉球王国が、一六六三年以後日本―中国貿易の仲介を再開したことである。このことは、それまで両地域の貿易を通じて大きな利益を得ていた台湾鄭氏の強力な競争相手が現れることを意味し、鄭氏にとつては大きな脅威となり得るものであった。こうした台湾鄭氏の危機感には、同じ時期に台湾鄭氏がこの貿易に従事する琉球王国の船舶をしばしば拿捕していたことにも、顕著に表れている。<sup>40)</sup>

史苑（第七九卷第一号）

このように、ポルトガル領マカオの存在や中国各地の当局による黙認を背景としてシナ海域において活発に商業活動を行える状況が展開した一方、シャムの対日貿易と琉球の中日間中継貿易の再開により競争が激化したことで、台湾鄭氏はそれまで貿易を行っていた地域に加えて新たな貿易相手を開拓する必要性に迫られていたと考えられる。ここにおいて一六六〇年代後半に偶然という形で邂逅したのが、バンテン王国であった。胡椒の取引で利害が一致した両者は、一六七〇年代にかけて急激に関係を構築・深化し、連携してジャワ島各地で活発に活動を展開する。

ジャワ島で積極的に活動を展開するようになった台湾鄭氏は、さらにその範囲や対象を拡大させようとした。鄭氏は台湾占領などをめぐって敵対するオランダ東インド会社との直接の貿易も意図した交渉を会社を持ちかける。次のVOCによる一六七一年の記録が、このことを示している。

夕刻、我々の元にジャワ人の船舶によって、バンテンにおける我々の商館長であるウイレム・カーフの四月一七日付の書簡が届き、「以下の」通知が含まれた。

〔中略〕

許可証担当の長であるオッケルスによれば、商館長は、もし国姓爺〔鄭經〕がVOCと契約を結ぶこと

## 台湾鄭氏とジャワ（久礼）

を望むのであれば、まずは「使者を」派遣して先の不当な戦争で彼の元へ行った全ての捕虜と物を返さなければならず、その場合は、合意を行うために大使と完全なる委員団を派遣すると告げた<sup>①</sup>。

この文章では、対象となる貿易品や捕虜などについては明らかとなっていないが、契約締結との文言があることから、鄭氏側はオランダ東インド会社と何らかの貿易を求めていることが読み取れる。さらに彼らは、同年九月に会社との和睦を求めて、バンテンを通じて交渉を行う。

カイツーという名の華人であるバンテンのシャーバングダルが、我々に、国姓爺（「鄭経」達が我々との和睦を望んでいると知らせた。しかし我々それには全く応じることはできないので、彼らが恭順を示し残りのオランダ人を送って赦免を願うように彼らに伝えるよう、口頭で返答しただけであった<sup>②</sup>。

だが両者の記録から分かるように、いずれについても、オランダ東インド会社は、台湾鄭氏について以前の戦争における補償を求めたこと<sup>③</sup>などから、両者の交渉が行われることはなかった。オランダ東インド会社と鄭氏とは、後者

による台湾占領以前から台湾周辺や中国沿岸における制海権をめぐって対立しており、会社は一六五七年に鄭氏の船舶の活動を妨害しないという鄭成功の要求を受け入れることを余儀なくされている。また、台湾を追われた後も、会社はカンボジアでも彼らに商館を閉鎖させられた。このためVOCは、あらゆる地域において彼らに対し終始一貫して敵対し続けた。例えば中国沿岸では、会社は一六六三年に清朝と結んで厦門と金門島を攻撃するなどの軍事的行動を行っている。こうしたオランダ東インド会社の態度は、ジャワにおいても同様であった。これまで挙げてきたように当該地域において鄭氏に関する記事が多く見られることは、オランダ東インド会社がジャワ島各地における彼らの活動を非常に警戒していたことを意味する。さらに一六七二年には、ジャワ北岸地域を航行していた台湾鄭氏の船舶を、会社の船が攻撃している。

今月（「六月」）七日、レンバンから数人の華人がやって来た。彼らが言うには、ヤハト船ホーヘランド号が台湾の華人が所有するジャンクを傷つけ、三ないし四人の華人とジャワ人一人が我々によって殺された。それが実際どうだったのか、閣下（「の者」）は機会があれば進んで聞くことを願って出発する<sup>④</sup>。

しかしながらVOCの文書で、ジャワ島において会社が台湾鄭氏の勢力を攻撃する記録はこれのみである。オランダ東インド会社は、ジャワ島における鄭氏の活動を非常に警戒しながらも、実力行使はほとんど行っていない。これには以下の理由があると考えられる。一つ目には、ジャワ島の周辺では会社が制海権を持っていたことである。オランダ東インド会社は、VOC以外の勢力について、バタヴィア政庁や各地の商館が航行許可証を発行して航行させる状況にあった。これに対し鄭氏も、原則会社の方針に従いバンテンを通じて航行許可証を得ていたため、あからさまな対立が起らなかったのではないか。二つ目には、台湾鄭氏がバンテン王国やイギリス東インド会社を後ろ盾にしていたということである。当時のバンテン王国スルトンのアブドゥルファター・アグンは、一六五五年にアチェ、ジョホール、マタラム、マカッサルによる反オランダのイスラーム王国の同盟を企図するほど、即位当初から失脚するまで反オランダ東インド会社の意図を強く持ち、それを考え出し得る勢力を誇っていた。一方イギリス東インド会社は、バンテンでの活動を通じて同王国や台湾鄭氏と友好的な関係を構築し、一六七〇年に鄭氏との間で通商協定を締結する。その内容には、軍事的な要素も含まれていた<sup>1)</sup>。一方のオラ

ランダは、一六六九年までマカッサル戦争を行っており必ずしも軍事的に余裕がある状況ではなかったものとみられる。いわば台湾鄭氏・バンテン王国・イギリス東インド会社が連合する軍事力を考慮した場合、オランダ東インド会社はジャワでの鄭氏の活動について、非常に警戒しながらも軍事的行動には自重せざるを得なかったのではないか。こうして、一方ではバンテン王国とイギリス東インド会社という強力な後援を得つつ、他方ではその関係を利用してオランダ東インド会社の制海権に対応した台湾鄭氏は、北岸地域では早くとも一六七二年まで、バンテン王国ではそれ以後も活動を続け、鄭氏配下の華人はジャワ全域に流入し続けたのである。

### おわりに

これまで述べてきたジャワ島における台湾鄭氏の活動をまとめると、以下の通りとなる。

中国・台湾と日本との貿易を柱として活動し、一六六二年の台湾占領以降はその活動範囲を東南アジア大陸部および島嶼部の一部まで拡大した台湾鄭氏は、一六六六年〜一六六七年の広南におけるバンテン王国からの使者と偶然邂逅したことを契機に、一六六九年以降はバンテン、また

一六七〇年以降にはジャワ北岸地域においてともに非常に活発に活動するようになった。鄭氏の活動は、前者については中国市場向け胡椒の入手、後者にかんしては多くが耐用年数を迎えた船舶の建造を目的とするものであり、それからバンテンのシャーバンダルであるカイツーや税関長キアイ・ンガベイ・チャクラダナ、北岸地域の華人を介して行われた。ジャワ各地で積極的に活動した台湾鄭氏は、さらに、成功こそしなかったが、オランダ東インド会社との和平も実現させようとした。当該時期にジャワ島で台湾鄭氏の活動が活発化した背景には、清朝による海禁令や遷海令の対象外であったポルトガル領マカオの存在や中国当局による黙認を背景として鄭氏がシナ海域において活発に商業活動を行えた一方、オランダ東インド会社と友好条約を締結したシャムの対日貿易や琉球王国の中日間中継貿易の再開により貿易競争が激化する状況で、台湾鄭氏が新たな貿易相手を開拓する必要に迫られたことがある。こうしたジャワ島における台湾鄭氏の活動に対して、オランダ東インド会社は、自らと敵対する彼らの活動を非常に警戒するものの、鄭氏がジャワ島周辺におけるVOCの制海権を認めバンテン王国を通じて発行された航行許可証を持って航海を行ったことや、台湾鄭氏が当時強力な軍事的を保持していた同王国やイギリス東インド会社と極めて友好な関係

を構築し両者を後ろ盾にしていたため、軍事的行動については自重を余儀なくされた。

ジャワ島において台湾鄭氏の活動が展開した後、奇しくもこれに関与する三勢力は、一気に衰退へと向かっていく。鄭氏は、一六七三年の三藩の乱への介入を契機に清朝の反撃を受け、一六八三年に同王朝に征服される。一方バンテン王国は、アブドウルファタアゲンと後の王となるスルタン・ハジとの間で内紛が発生し一六八〇年の宮廷クーデター、一六八二年のオランダ軍介入や以後の王国への干渉へとつながっていく。また、ジャワ北岸地域を支配したマタラム王国ではアマンクラット一世の政策に反抗したマドウラ島の王子トルノジョヨが一六七五年に起こしたトルノジョヨ反乱が中部ジャワから東部ジャワにおいて一六八〇年まで大きく展開し、これに介入しマタラム王国とともに鎮圧したVOCがその後同王国に強く干渉するようになった。これらについて著者は、胡椒や造船の貿易を通じてそれぞれの勢力が得た利益や、これに伴って行われたジャワ島各地への台湾鄭氏配下華人の流入が影響を与えた可能性があるのではと考えるが、これについてはまた改めて論ずることにしたい。



註

- (1) 本ここではジャワ北岸地域をバタヴィア、バンテン、ジャワ中部のチルボンを除いたマタラム王国の支配下に入った北部沿岸地域を指す。
- (2) Cheng Weichung, *War, Trade and Piracy in the China Seas 1632-1683*. (TANAP Monographs on the History of Asian-European Interaction, vol. 16). Leiden: Brill, 2013. 鄭維中「郭陽訳」「清朝の台湾征服とオランダ東インド会社―施琅の「台湾返還」密議をめぐる―」中島章彦編『南蛮・紅毛・唐人』(二〇一三年、思文閣出版)所収、三一―三六五頁
- (3) 上田信『海と帝国―明清時代―』(中国の歴史九(二〇〇五年、講談社)、同『シナ海域蜃気楼王国の興亡』(二〇一三年、講談社)
- (4) 坂井隆(一九九三)「肥前陶磁の輸出と鄭氏・バンテン王国」『東南アジア―歴史と文化―』二二一号、二〇〇二年、六七―九四頁、同『港市国家バンテンと陶磁貿易』(二〇〇二年、同成社)
- (5) すなわち、この時点での名は朱成功となる。しかしながら他方で、明朝皇帝と同じ姓を対外的に用いることははばかられたため、自らは王朝の姓である「国姓」を持った「爺」[年長の男性に対する尊称]という意味の「国姓爺」を名乗った。VOC文書では、鄭成功をはじめ台湾鄭氏勢力のことを「国姓爺」「国姓」に由来する“Coxin”や“Coxinha”などと表記する。なお、「鄭成功」の呼称は、台湾鄭氏や明朝と激しく対立した清朝側の文獻において用いられる。
- (6) 上田『シナ海域蜃気楼王国の興亡』、二八五―二九五頁。

史苑(第七九卷第一号)

- (7) 但し他方でVOCも、ジャワ島沿岸においては航行許可証を発行し、それを持たない船舶の拿捕および貨物の没収を行っていた。
- (8) Cheng, op. cit., Chapter 6
- (9) Cheng, op. cit., pp. 132-133.
- (10) Cheng, op. cit., pp. 172-174.
- (11) タイ領にある現在の名称はナコンシータンラート。
- (12) Cheng, op. cit., pp. 235-236 この前段階として鄭氏は、シヤムなどに加え一六五四年にカンボジアやリゴールにも一度自らの貿易船を派遣している。そこで関係を構築しようえて、一六六〇年代に大規模な貿易を展開させた。
- (13) 遠藤正之『カンボジアにおけるマレー人の活動―一六世紀―一六世紀を中心にして―』(立教大学博士論文「未公刊」、二〇一七年)七頁。
- (14) Blussé, L. *Strange Company: Chinese Settlers, Mestizo Women and the Dutch in VOC Batavia*. Foris Publications, 1988, p. 119.
- (15) Blussé, op. cit., p. 117; Cheng, op. cit., pp. 191, 198-199
- (16) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vamt Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India, anno 1663*, p. 252. [15-6-1663]
- (17) 坂井『港市国家バンテンと陶磁貿易』、一〇二頁。
- (18) 坂井『港市国家バンテンと陶磁貿易』、一〇二頁。Guillot, C. *The Sultanaat of Banten, Gramedia*, 1990, pp. 42-43
- (19) Nationaal Archief, VOC 1264. f. 696. [12-3-1667] ( ) 部分は著者による補足。なお、キアイ・ンガニイ・チャクラダ

台湾鄭氏とシヤワ（久礼）

- ナはオランダ東インドの各文書ではキナイ・ネン・セクレタ  
ナと書かれていゝ。
- (20) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1660, p. 208. [29-11-1670]*〔〕部分<sup>ナ</sup>は著者<sup>ナ</sup>に  
よる補足。
- (21) 船舶積載量の単位で、一ラスト＝二トン。
- (22) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1671, pp. 263-264. [26-2-1671]*〔〕部分<sup>ナ</sup>は著  
者<sup>ナ</sup>による補足。
- (23) オランダ語のトン(ton)には、いゝゝかの意味があり、こ  
ゝでは重量のトンと一〇万ギルダールのいざれかが考えられ  
ゝ。こゝでは前者で訳したが、後者の可能性もあることを記  
して置く。
- (24) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1671, p. 273. [13-3-1671]*〔〕部分<sup>ナ</sup>は著者<sup>ナ</sup>によ  
る補足。
- (25) 一例に *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia  
vant Passende daer ter Plaetse als over Geheel  
Nederlandts-India, anno 1674, p. 48. [15-2-1674]*が有る。
- (26) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1678, p. 33. [18-1-1678]*
- (27) 坂井『港市国家と南洋の陶磁貿易』二二五―二三一頁。
- (28) Chang Hsiu-jung et. al ed. (1995) *The English Factory*  
in Taiwan 1670-1685, pp. 94-95 [30-6-1671], pp. 220-221  
[22-12-1675]
- (29) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1677, p. 144. [22-5-1677]*
- (30) 「港灣長官」と訳される東南アジアの港に存在した外国商  
船ならびに居留外国人の管理責任者。王権から任命され土  
地の権力者に代わって外国商船の接待、管理、徴税および  
居留外国人商人の統制にあたった。
- (31) Guillot, op. cit., pp. 48-52.
- (32) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant  
Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-  
India, anno 1668-1669, p. 409. [6-9-1669]*
- (33) Guillot, C. "Seorang Pakar Pembangunan dari Adad  
ke-17 di Banten: Kiayi Bgabei Cakradana." *Banten  
Sejarah dan Peradaban Abad X-XVII, Kepustakan  
Popular Gramedia and Ecole française d'Extrême-Orient,*  
2008, pp. 352-356.
- (34) 重量の単位で、一ロヤン＝約一七五〇キログラム。
- (35) *Nationaal Archief, VOG 1283, f.1351. [22-3-1671]*〔〕  
部分<sup>ナ</sup>は著者<sup>ナ</sup>による補足。
- (36) *Nationaal Archief, VOG 1290, f.143. [12-4-1672]*〔〕  
部分<sup>ナ</sup>は著者<sup>ナ</sup>による補足。
- (37) *Nationaal Archief, VOG 1290, f.155. [23-7-1672]*〔〕  
部分<sup>ナ</sup>は著者<sup>ナ</sup>による補足。
- (38) 一七〜一九世紀に日本近海で航行した弁才船の耐用年数  
は大凡二〇〜三〇年である。〔石井謙治『和船一』(そのこ

人間の文化史七六一) (法政大学出版会、一九九五年)、二三五―二三八頁] ジャンク船もほぼ同様であったのではないか。

(39) Cheng, op. cit., pp. 232-236.

(40) Cheng, op. cit., pp. 236-237.

(41) *Dagh-register, Gehouden int Casteel Batavia vant Passende daer ter Plaetse als over Geheel Nederlandts-India*, anno 1671, p. 298. [19-4-1671]

(42) *Generle Missien van Gouverneurs-generaal en Raden aan Heren XVII der Verenigde Oostindische Compagnie*, Deel III, p. 747. [2-9-1671]

(43) この戦争が何を指すかは明らかではないが、補償の内容から考えると鄭成功の台湾占領ではないか。

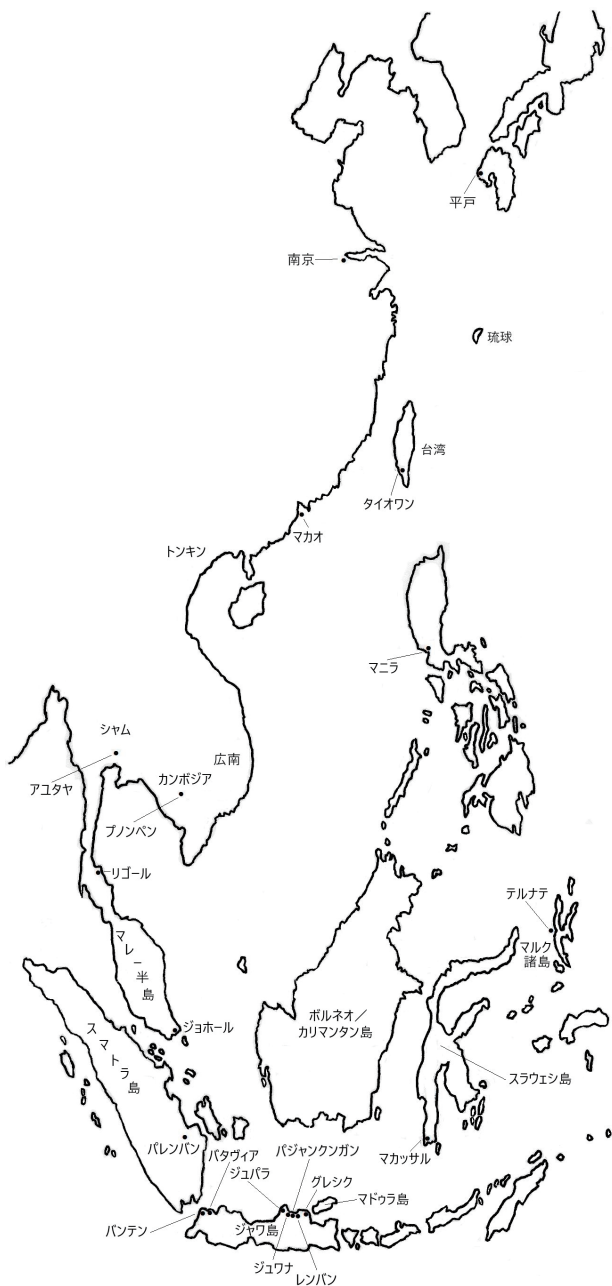
(44) *Nationaal Archief, VOO 1290, f. 152*. [24-6-1672] [ ] 部分は著者による補足。

(45) Ts'ao Tung-ho "Introduction: The English Company and Cheng regime on Taiwan", *Chang Hsiu-jung et. al*, op. cit., pp. 12-13.

(46) トルノジョヨ反乱では、ジャワ北岸地域の港市の多くで反乱軍によって華人が襲撃されたことで彼らの多くが殺され、生きのびた者もバタヴィアやバンテンに避難している。[拙稿『ジャワ北岸地域の華人』(立教大学博士論文「未公刊」)二〇一三年、六四―六六頁。]

(立教大学アジア地域研究所・特任研究員)

川村学園女子大学文学部史学科・非常勤講師)



地図1：シナ海・マラッカ海峡・ジャワ海周辺



地図2：台湾海峡周辺

## The Kingdom of Tingning and Java

KURE, Katsutoshi

台湾鄭氏とジャワ  
(久礼)

The kingdom of Tingning acted vigorously both in Banten from 1669 onwards and in the Java's north east coast after 1670. That started from the kingdom's accidental encounter with the ambassador of the kingdom of Banten from 1666 to 1667.

Their activities are aimed to get a pepper for the Chinese market and to build ships. Two prominent Chinese in Bantam, Kaitsu and Kiayi Bgabehi Cakradana and Chinese in the Java's north coast, assisted the kingdom's activity. The kingdom also tried to realize peace with the Dutch East India company although it did not succeed further.

There is two reasons of the activity of the kingdom of Tingning in Java. One is the existence of Portuguese Macao which was not covered by the maritime prohibition by the Qing Dynasty, so the kingdom was able to vigorously conduct commercial activities in the waters. Another is keen competition with Siam and Ryukyu for trade, that is pioneering new trading partners the kingdom of Tingning have been pressed to need.

In response to the kingdom of Tingning's activities on Java Island, Dutch East India Company (VOC) is very wary of their activities against themselves, but their military action was forced to take weight. There are two reasons. One is that the kingdom acknowledged the VOC's naval right around Java, and it did not dare to infringe on co-moany's right in that region. The other is that the kingdom of Tingning built a very friendly relationship with the Bantam and the British East India company, both had kept strong military force at that time.